

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

フィレンツェ滞在手記

* 楽しみとしての語学留学 ② *

濱 恵介

今回はフィレンツェ滞在の生活拠点となった住居、この街での暮らし方、それとルネサンス美術の鑑賞について述べたいと思います。

■住居と暮らし

斡旋してもらった住まいの場所は、大聖堂から北東へ 600m ほど、都心に近い立地と言えます。建物は 4 階建て集合住宅の 1 戸で、家主と同じ 1 階にあります。台所とシャワーが共用の 2 寝室アパートメント。台所と寝室の一つは緑豊かな中庭に面し、その斜め向かいのアパートメントに家主である年配の婦人が住んでいるという形です。便利な場所にありながら、表通りとは別世界のように静かで落ち着いた住環境でした。

寝室のうち奥の部屋はより広くベッドが大きく収納も多いけれど自然光に乏しく、もう一つの部屋は庭に面し明るい狭い、どちらを使ってもよいという状況でした。台所は食事できる広さがあり明るく、テーブルで読書や書き物などが出来るので、寝室は寝るだけと割り切り奥の部屋を使うことにしました。建物は 16 世紀の創建とすることで、当時の絵地図にも出ているそうです。天井は交差ヴォールト(アーチが十文字に交わる形)で、稜線が壁に収まるころには石彫りのキャピタル(柱頭)のような飾りが残り、歴史を感じさせます。

同宿者は 1、2 週間単位で延べ 3 名が 4 週間もう一つの部屋に滞在しました。その期間以外はアパートメントを一人で使っている形で、他人への気兼ねもなく悠々と暮らすことが出来ました。家主のアパートメントにはもう 1 部屋貸間があって、そ

こにもイタリア語を学ぶ外国人が泊まることができました。最初の 6 週間は「ホームステイ」という契約で、朝食と夕食が供されます。その期間、食事は家主の台所兼食事室に行き、彼女と二人ないし他の客がいる時は 3~4 人で一緒に摂りました。食事の心配をせずイタリアの家庭料理を味わえるだけでなく、イタリア語会話の良い機会となり、実に良い選択だったと思います。但し、宿泊者の中には本国でイタリア語の教師をしているようなプロもいて、会話についていくのが難しい状況があったのも事実です。



【お気に入りの通学路、セルヴィイ通り】

学校までは歩いて 15 分ほど。フィレンツェは歴史遺産に満ちた都市ですから、通学する道筋は言わば「建築博物館」の見学順路のような感じで、特にサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂の巨大なクーポラを街路の突当りに望む景色は印象的でした。(前ページ写真)

フィレンツェの中心部は 1.5km 四方ほどしかなく、少し頑張れば歩いて殆どの用事が済ませられます。フィレンツェに限らず歴史的な市街地は自動車の乗り入れが厳しく制限され歩行者優先なので歩きやすいです。それでも少し離れた場所への移動はバスやトラムを使うことになります。90 分以内ならどこまで行っても、何回乗っても最低料金で済みます。

昼食にレストランに入ることは例外的で、パニーノ(イタリア式サンドイッチ)やピッツァを買って自宅に帰り、お茶かコーヒーを淹れて台所で済ませるのが一般的でした。学校にはカフェなど食事できる施設はありません。その代り学校で 1 枚当たり€6 の食券(5 枚セット)を買い、指定された店で飲み物付き一品料理が食べられるのは、有難いシステムでした。

食糧や日用品の買い物は住まいの近くにあるスーパーマーケットを利用します。都心の店舗で日本と勝手が違うのは、歴史的な建物の制約から間口が狭く奥行きがとて深かったことです。レジも横に並べるスペースがないので縦列の配置。また野菜・果物は 1kg の単価で示され量り売りが基本で、自分で秤の載せ所定のボタンを押すと請求額等を印字した粘着シールで出てきます。少量でも買いやすく、慣れればその方が合理的だと思いました。

衣類とシーツの洗濯や部屋の掃除は週に 1 回家主がやってくれました。衣類を始め持ち物がほんの僅かなので、部屋の片づけは殆ど手間がかかりません。余計な物を持たないシンプルな生活スタイルの心安さを実感しました。

食事提供の契約期間が終わってからは、台所の設備を使って自炊するのが基本です。食器や調理器具も揃っており、簡単な料理ながら夕食も自分で作りました。他の間借り人は誰も自炊をしなかったのも、冷蔵庫を含め台所は自分専用のようなもので、この状況は一般的な「学生アパート」の概念より恵まれた条件だったと思われま

家主の趣味でよく手入れされた中庭は、私の滞在に潤いと楽しみを加えました。バラの花が咲く庭のテーブルでは、朝食を取ることもあり、午後にはコーヒーを飲みながら日記を書いたり読書したり、心地よい環境で贅沢な時間を過ごすことができました。

なお、住居費は最初の 6 週間(朝夕食付き)が€1,305、後半の 5 週間(室料のみ)が€670 でした。アパートメントを借りて住むことは、1 泊当たりのコスト比較でホテルよりかなり割安であるばかりでなく、そこが自宅のように感じられ気持ちを和らげてくれます。

家主との関係は常に良好で、お陰様で気持ちよい滞在となりました。彼女はフランス語が少しできるのでイタリア語が分からない時は助かりました。加えてイタリア美術に関する造詣が深く、いろいろなことを教えてくれました。美術書も数多く見せてもらい、「その都市へ行くのなら某所でしかじかの作品を見たらよい」などと見学の手引きまでしてもらえたのは、予期せぬ喜びでした。

■美術鑑賞

イタリアへ行くことを決めるまで、ルネサンス美術への私の関心は、さほど深くなかったかもしれませんが。準備の一環として参考となる本を図書館から借りて読みあさるうちに、その奥深さに引き込まれたようで、現物を見たい作品のリストを整備するに至りました。フィレンツェ以外を含め都市と施設名を軸に作品名と作者を整理し、現地での対面に備えました。彫刻や建築にも関心を持ちながら、今回の対象は絵画が中心です。

予備知識や先入観なしで美術作品に接するのも良いのですが、それでは見るべき作品の多くを見過ごしたかも知れませんし、理解も深まらなかったらと思います。鑑賞は美的感覚だけでなく作品に込められた制作の目的や芸術家の意図などを理解してこそ、味わい深いものです。今回はアレゴリー(寓意)やアトリビュート(象徴としての持ち物)などの謎解きは随分勉強になりました。絵のテーマとなった神話や聖書の物語などの理解も欠かせません。また、テーマが聖書の情景であっても衣装・風俗や背景の都市景観はルネサンス期のものを反映しているものが多いと知り、この視点からの観察も楽しみました。

しかし最大の感動は、芸術家の執念というか凄まじい気迫と技巧に圧倒されたことでした。画面の構成や色彩は写真でも大体分かりますが、現物を見なければ分からない点がいくつかあります。まず作品の大きさや置かれた状況、そして何と言ってもディテールの迫力です。髪の毛一本一本や衣服の刺繍や宝飾の光沢・透明感など細部へ迫るこだわりが恐ろしいような作品があるのです。これは美術書では決して実感できない点でした。目にした作品の大部分はキリスト教のテーマを扱ったものですが、その中に登場する人々の感情や肉体の生き生きとした表現を通じて、芸術家の理想や主張を500年経った今なお感じることができるのは、何と素晴らしいことでしょう。

フィレンツェでは、ウフィッツィ美術館が発行する通年の入館カードを購入し何度も訪れました。これは市内と近郊にある他の国立の博物館・美術館にも有効で、パラティーナ美術館(ピッティ宮殿)やバルジェッロ博物館など、著名な施設へ繰り返し入れます。授業の後などに時間をかけて美術作品と対面できるのは、旅行者として慌ただしく見学するのにくらべて、滞在する者の特権のように思いました。

キリスト教の聖堂もまた美術の宝庫です。主祭壇まわりだけでなく、附属する礼拝堂や側廊の壁などにも名画があります。聖堂における美術作品は、神やキリストや聖人たちの栄光をたたえ、信仰をより確かにするための説明図ないし舞台装置ですから、それらの存在目的は美術館の展示物とは根本的に異なります。テーマによっては重苦しい気分にもなりますが、キリスト教が西洋芸術を育てた事実を感じさせられました。

「最後の晩餐」の情景を扱った壁画(チェナーコロ)の大部分は修道院の食堂に描かれたものなので現地で見ることになります。見学者で混雑する有名美術館と異なり、殆ど人のいない静かな環境でじっくり絵と対面できます。オンニ・サンティ、サンタポローニャ、サン・サルヴィなどに残るチェナーコロの鑑賞は、至福の時と思えました。

フィレンツェ以外の都市でも、まずは美術館を目指しました。目的の作品を見るために訪問する都市を選ぶこともあります。歴史的な都市には優れた美術品があるものです。訪問した順に列挙すると、サンセポルクロの市立美術館、ウルビ

ーノの国立マルケ美術館、ミラノのアンブロジアーナ絵画館とブレラ絵画館、ピサのサン・マッテオ国立美術館、シエナの国立絵画館、ペルージアの国立ウンブリア美術館、ボローニャの国立絵画館、パードヴァのスクロヴェーニ礼拝堂(市立博物館)、ヴェネツィアのアカデミア美術館、等々。ついには「もう十分」と飽食気味になってしまうほどルネサンス絵画を満喫した旅でした。

ローマやナポリまでは敢えて足を延ばさず、今回のイタリア訪問の目的に取って置く、という位置づけにして諦めました。次は少し時間をあけて感受性をリフレッシュしてから、これらの都市にある作品と対面するのが良さそうです。



【スクロヴェーニ礼拝堂、ジョットのフレスコ画で名高い】

それにしてもイタリアとは何と大量の、かつ素晴らしい美術作品を蓄積した国なのでしょう。絵画や彫刻だけでなく都市を構成する歴史的建築群の重厚感には圧倒されます。「日本の木造建築に比べ、石や煉瓦造りの方が長持ちし蓄積されやすい」という素材と耐久性の単純比較では済まない文化の違いを感じました。イタリアでは壊れたものでも簡単に捨てず何とか活用する傾向があることも共通するのではないのでしょうか。

多くの都市では、優れた美術作品と都市の歴史的美観がツーリストを呼び込み経済を動かしている、というのも事実です。往時の特権階級は民衆を搾取し富を蓄積したかもしれないけれど、目的が何であれ彼らが財を費やし作らせた偉大な建築物や美術作品のお陰で、後世のイタリア社会は収益を得て、イタリア人を含め世界中の多くの人々は大きな感動と喜びを享受している、と言えます。(続く)

(個人維持会員、エコ住宅研究家)

『素晴らしき自転車レース 22』

ヘミングウェイと自転車レース

谷口 和久

ヘミングウェイは大好きな作家で、10代のころからよく読んでいたのだが、作品の中で自転車のことも取り上げていると気づいたのは、つい最近のことだ。フィッシングや闘牛がお好みと思い込んでいたので、これはなんとも意外であった。さらにヘミングウェイの自転車愛は、イタリアへの思慕ともからみあっているようで、そんな視点で一度、作品を読み返してみた。

晩年に書かれた『移動祝祭日』は、若き日のパリ時代を回想した作品だが、その中のエピソードでのこと。まだ駆け出しの作家で、家計の大半を馬券で稼ぐような生活を送っていたヘミングウェイであったが、ある日、一大決心してヤクザな馬券生活からは足を洗うことにした。ちょうどそんな決心をしたころ、知人に「競馬より面白いものって、どんなものがあるんだろう？」とたずねたところ、「自転車レースがあるじゃないか」と助言されたのが自転車にはまるきっかけであった。

競輪場でくりひろげられる目まぐるしいまでのつばぜりあいや、美しい山岳地帯でのロードレースに魅せられたヘミングウェイは、何度か自転車レースを題材にした作品を書こうとしたものの、「ロードレースの素晴らしさに太刀打ちできる作品を書きあげることはついにできなかった」と述懐している。

ひとつ注釈を加えておくと、日本で「競輪」というと、競馬や競艇と同様、公営ギャンブルであるが、ヨーロッパのそれは賭け事の対象ではなく、あくまで純粋にレースを楽しむものである。

ところで、この本のタイトル『移動祝祭日』を初めて目にしたとき、「まさにツール・ド・フランスやジロ・ディ・イタリアといったグランツールを言い表した言葉だ！」と、ひとり勝手に合点してしまった。(実際には、ヘミングウェイが知人に語った言葉

「もし幸運にも、若者の頃、パリで暮らすことができたならば、その後の人生をどこですごそうとも、パリはついてくる。パリは移動祝祭日だからだ」にちなんだものです)



【若き日のヘミングウェイ ミラノにて】

画像出典: https://en.wikipedia.org/wiki/Ernest_Hemingway

初の長編であり出世作となった『日はまた昇る』の中で、ヘミングウェイはイタリア人初のツール覇者オッタヴィオ・ボッテッキアを登場させている。舞台は1925年のスペイン・バスク地方でのことである。

「ロスト・ジェネレーション」とよばれる退廃的で野放図な仲間たちとの闘牛観戦の旅で、主人公は心の中に少なからぬ傷を背負いこむこととなった。その傷をいやすかのようにスペインの海沿いの避暑地をひとりおとずれた主人公は、ホテルでレース中の自転車チームの一団と遭遇し、明るく前向きな選手たちの空気にこちよく包みこまれた様子である。

ヘミングウェイは、作中のチームマネージャーに自転車レースについて次のように語らせている。「自転車の長距離レースこそ世界でただ一つのほんとうのスポーツだ」と。

ポットッキアについては、当人が直接出てくるわけではないのだが、このマネージャーの話の中で次のように言及されている。「もしポットッキア(筆者註:ポットッキアのこと)がパンプローナで棄権しなかったら、十分見ごたえのあるレースになったにちがいない」。

このポットッキアの棄権というのは、実際にあった話なのである。『日はまた昇る』自体、現実のエピソードを多分に盛り込んだフィクションなのだが、この作品を執筆中の1925年8月にバスクー周レースが行われており、ヘミングウェイも新聞でレースの様子を追っていただろう。事実、ポットッキアは第2ステージを出走することなく棄権した。ひと月前のツール・ド・フランスで連覇を果たしたばかりのポットッキアは、このレースでも目玉だっただけに、周りの失望は大きかったに違いない。



【アルプスを上るポットッキア】

画像出典: <http://www.cyclingarchives.com/beeldfiche.php?beeldid=108984>

もうひとつ、ヘミングウェイの作品で自転車レースに言及されたものとして『武器よさらば』がある。

この作品は、若き日に自ら志願して第一次大戦時のイタリアの最前線に赴き、赤十字兵として戦場で活動した、その時のエピソードにもとづくものである。

国境付近で一進一退を繰り返していたイタリア軍とオーストリア軍であったが、ロシア革命がおこったことで東部戦線から戦力を回すことができるようになったドイツ軍がオーストリアの支援に来た

ことで、形勢を一気に逆転される。最新の兵器と機動力をいかしたドイツ軍の侵攻に、イタリア軍は上を下への大混乱。伊奥国境の山岳地帯から、ゴリツィアやウーディネなどフリウリの地を横切って、西へ西へと、兵士も住民たちも必死の撤退を図った。

この時の戦いでイタリア軍は4万の死傷者に加え、25万もの捕虜を取られる結果となった(いずれも数字は諸説あり)。このとき主戦場となった「カポレット(現スロヴェニア領)」は、「パール・ハーバー」などと同じように、単なる地名以上の意味合いをのちのちまで持たせられることとなったのである。

救急車両部隊の隊長であるアメリカ人の主人公は、イタリア人の部下たちをしたがえ混乱の渦中にあっただが、退却途中、裏道を抜けようとしたところで自動車が進めぬかみにはまり、にっちもさっちも行かなくなった時に、こんなやりとりをしている。

- 部下 A 「自転車があればいいんだがな」
- 部下 B 「アメリカでも自転車に乗りますか？」
- 主人公 「よく乗っていたよ」
- 部下 B 「こちらじゃ自転車というと、たいしたもののんですよ」
「自転車って、まったくすばらしいものだ」

最後のまったくすばらしい(!)セリフを口にしたイタリア人部下 B は、ヘミングウェイによってアイモという名前をあたえられているのだが、このアイモという名は、実在のイタリア人選手、バルトロメオ・アイモ Bartolomeo Aimo にちなんだものである。作中では、ファースト・ネームのバルトロメオで呼ばれることもある。

バルトロメオ・アイモは、ちょうどこの作品が書かれた1920年代半ばに活躍した選手で、ビッグタイトルにはめぐまれなかったため、その名が表に出てくることはまれであるが、ツールでは3位が2回、ジロでは2位が1回に3位が3回と、表彰台の常連であった実力者である。ことにツールでは、当時、飛ぶ鳥を落とす勢いだったポットッキアにいくたびとなく挑んだものの、残念ながらポットッキアの牙城を崩すにはいたらなかった。

作中のアイモは、退却中に友軍の誤射にたおれるという、なんとも哀れな最期を遂げるのだが、

実際のアイモは両大戦をくぐりぬけ、1970年に81歳の天寿をまっとうした。



【バルトロメオ・アイモ】

画像出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Bartolomeo_Aymo

『武器よさらば』の中での自転車のやり取りもそうだが、ヘミングウェイはイタリア人たちとの会話を実にいきいきと描いている。戦場という過酷な状況下において、イタリア人の部下や同僚たちは、へらず口や上層部への批判を口にしながらも、常に胸の中に希望を持ち続けているように見える。

ヘミングウェイ自身がなによりイタリアに惹きつけられていた証ではないだろうか。そもそも、若き日のパリ行きも知人から説得されたもので、自身は当初イタリアに行くつもりだったほどである。

さらにつけくわえれば、自転車レースも同様に終生ヘミングウェイの心をとらえて離さなかったにちがいない。『移動祝祭日』の自転車レースは室内競技が中心ではあるが、レースの様子が見事な筆致で描かれている。文豪によるロードレースの作品など、もし草稿でも見つければ、ぜひとも読んでみたいものだ。

〔参考資料〕

『移動祝祭日』（ヘミングウェイ著、高見浩訳、新潮社、2009）

『日はまた昇る』（ヘミングウェイ著、大久保康雄訳、新潮社、1978）

『武器よさらば』（ヘミングウェイ著、大久保康雄訳、新潮社、1988）

『ヘミングウェイと戦争』（日下洋右著、彩流社、2012）

『ヘミングウェイ大事典』（今村樞夫他監修、勉誠出版、2012）

『ツール・ド・フランス100回グレートヒストリー』（フランソワーズ・ラジェ他著、宮本 あさか訳、八重洲出版、2013）

『第一次世界大戦』（山上正太郎著、講談社、2010）

<http://cycling-passion.com/> 関連情報

wikipedia 関連情報

（当館スタッフ）

イタリアンレストラン紹介 ～奈良～

Taverna CERVINO

タベルナ チェルヴィーノ

地元産の有機野菜をふんだんに使った、イタリア地方料理をメインとしたレストランです。毎年イタリアに渡って現地の最新事情を学び、旬のお料理をご提供させて頂いております。

特典：1ドリンクサービス(12月末まで)

(赤白ワイン ソフトドリンク カクテルから)

(日本イタリア会館会員証をお持ちの方)

住所：奈良市小西町5番地 アルテ館1F

電話：0742-26-5955

ランチ：11:30～14:30

ディナー：17:30～22:00

定休日：火曜日

Facebook：「タベルナ チェルヴィーノ」で検索ください

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp/>